

テーマ『人権の視点に立ったクラス集団づくりを考える』

常磐会短期大学 教授 ト田 真一郎さん

人権保育専門講座8は、4回の連続講座です。家庭支援推進保育士の方を中心に、専門性を高めたい保育関係者の方々を対象に開催しています。



この連続講座は、各回で取りあげるテーマについて、3つのステップを踏みながら、段階的に学びを深める形ですすめていきます。

ステップ1 各現場で抱えている課題を『共有』する。

ステップ2 お互いの取組を『交流』する。

ステップ3 人権保育推進のため、誰に対して、何を、どのように『発信』するのかを考える。

1 前回の講座で出された「現場の課題」より

前回(第1回)は、各現場で直面している課題について、参加者のみなさんにブレインストーミングで出し合っていました。まとめると3点の課題がみえてきました。

- ① 子どもの人権保育をどのように進めていくのか
(特に・・・『クラス集団づくり』をどのように進めていくのか)
- ② 保護者支援をどのように進めていくのか
- ③ 保育者集団のなかで、園内の人権研修をどのように進めていくのか

今後の連続講座については、①から③の課題解決に向けて考えていきたいと思えます。第2回の今回は、①のことについて『人権の視点に立った集団づくりを考える』をテーマに開催しました。ゲストスピーカーに、豊中市の八木桂子さんをお招きし、「『さあちゃんがわるいんちゃうやろ!』～さあちゃんの好きな遊びをとおして広がっていった仲間関係～」と題してお話をいただきました。



2 八木桂子さんのお話から

テーマ 『さあちゃんがわるいんちゃうやろ！』

～さあちゃんの好きな遊びをとおして広がっていった仲間関係～

【八木桂子さんの紹介】

一昨年まで豊中市の公立保育園で園長として勤務されました。「子どもへの共感」を大切にされる八木さんは、昨年度は再任用として保育園でクラス担任をされました。その時の実践を今回の講座で報告いただきました。

また、八木さんは『四・五歳児の人権保育』～はぎしりに共感することから～』という本を執筆されています。



私が勤めはじめた40年前は、豊中市の「同和保育基本方針」と「障害児教育基本方針」のもと、人権保育を一生懸命おこなっていた先生がたくさんいました。私は、そうした先生方にたくさんの刺激を受け、人権保育の精神を大切に今日まで保育士をやってきました。

近年、「障がい児共生保育」の視点で考えることが多くなりました。昔は、加配の先生にあまりクラスに入ってもらっていませんでした。障がいのある子ども共に学び、共に育つということが大事だと考えていたからです。近年はクラスに入っただく加配の先生が多くなりました。障がいのある子どもへ加配の先生がすぐに手を差し伸べるため、周りの子どもたちのかかわりが奪われたように思います。子どもたちが共に育つインクルーシブ(*)な社会の実現を見据えたとき、この体制の在り方に疑問を感じます。



(*)インクルーシブ(inclusive)：「包括的な」の意。(⇒講座1 [棚田さん]のP1 参照)

〈子どもの実態〉

私は昨年、3歳児のクラスを担当しました。クラスには障がいのある**さあ**(仮名)がいました。**さあ**は、自閉症スペクトラムで、表情は硬く、言葉は出ませんでした。身の回りのことを自分ですることができず、一日中園内を散策していました。**さあ**は自分がしてほしいことがあると保育士の手を引いて「してほしい」と表現しました。しゃぼん玉、風船、ボール、乗り物に乗るなど動く物が好きな子でした。

クラスの子どものなかには、部屋から出ていく**さあ**のまねをして、「さあちゃんと遊んでくると言っついて行ったにもかかわらず、別の遊びをしている子がいたり、赤ちゃんにかかわるように一方的に**さあ**に触る子がいたりしました。

私は、そのような周りの子の**さあ**への見方やかかわり方が大変気になりました。**さあ**の表情が曇ることがあったからです。私は**さあ**が嫌がっていたり、不快に感じていたりするのではないかと思いました。



子どもの気になる姿や表情を見た時、そのことを保育士自身がどう捉えるのかが大事です。保育士の正しい子どもの捉え方が、子ども理解につながり、その後進むべき保育の方向に大きく影響してきます。しんどい立場に置かれている子どもの姿や表情から、その子がどのようなことを思っているのか、保育士がしっかり捉える必要があると思います。

〈ねらいと取組〉

このような子どもの実態があるなかで、**さあ**が周りの子に認められ、尊敬し合える仲間づくりをめざしてねらいを立てました。

★子ども像★

- ① どの子も好きな友だちがいて、一緒に遊ぶなかで、お互いのおもしろさを感じ、友だちの良いところと言える。
- ② どの子も好きな遊びがあり、自信をもっている。
- ③ 自分の思いも言え、相手の子にも思いを聞こうとする。
- ④ 相手が喜ぶことが何か、遊びのなかで感じかかわる。
- ⑤ 他児の嫌がることはしない。嫌なことをされたとき「やめて」「いやや」と言える。
- ⑥ **さあ**の好きな遊びをグループの子がおもしろいと感じ、**さあ**のまねをする。**さあ**もグループの子の遊びに関心をもち、まねるようになる。
- ⑦ **さあ**の表情やしぐさから、うれしい・かなしい・いやや・やめての気持ちがあり、代弁できる子がグループのなかにいる。一方的で強引なかかわりをする子に「さあちゃんいやがっているで。やめたり」と代弁していける子がいる。

このように子ども像を挙げましたが、抽象的なんですね。子どもたちの決めつけは4、5月が一番強いというわけではありません。プラスに友だちと知り合っていく子は生き生きとしてきますが、友だちをマイナスに見ていくと、決めつけは悪い方にはっきり出てきます。ですので、夏から秋にかけて抽象的だった子ども像を具体的に軌道修正していく必要があります。

具体化することでねらいを実現させていきます。**さあ**の好きな遊びを通して どうかかわり合うか具体化していくんです。そして、遊びのなかで共通なしぐさや身振りをしながら子どもたちが「通じ合えたよな」と感じ取らせていくんです。



さあの好きな遊びを周りの子と楽しむなかで育った力

～しゃぼん玉遊びのおもしろさと関係の発展



子どもたちの かかわる段階	子どもの姿
1の段階 (仲良しの段階)	□…しゃぼん玉を見るのがおもしろい。 ○…保育士や他児が吹くしゃぼん玉を見るのがおもしろい。 → 先生にしゃぼん玉の容器を差し出す(要求する)
2の段階 (生活を知り合う段階)	○▲…ストローをくわえるが、しゃぼん玉が作れないので、そばにいた他児に自分のストローを差し出す。 → 他児がストローを吹いてしゃぼん玉を作ってやる。他児は何度も さあ の要求に応じる。 ▲…保育士が「ふーって吹いてごらん」と実際に声に出しながら何度も吹いて見せる。 □…「ふーっ」と言いながら自分でしゃぼん玉を作るようになる。
3の段階 (尊敬を追求する段階)	〈前半〉 □…自分で作ったしゃぼん玉を見るのがおもしろい。 ▲□… さあ がしゃぼん玉遊びを始めると、他児も一緒になって遊ぶようになる。 〈後半〉 □…ストローを勢いよく吹くと小さいしゃぼん玉がたくさんでき、ゆっくり吹くと大きなしゃぼん玉ができることを発見し、いろいろなしゃぼん玉を作ることがおもしろくなる。 ○隣の子が作ったしゃぼん玉の形が気に入り、見るのがおもしろい。
4の段階 (共同体の段階)	□…しゃぼん玉を大きく作って指でつぶすのがおもしろい。 □…もっと大きなしゃぼん玉を作りたいとの思いから、保育士のまねをして輪っか(しゃぼん玉を作る道具)を使ってしゃぼん玉を作るのがおもしろい。 ○…輪っかをつける液の入った皿を他児と共有することで、他児が使っている時に待てるようになる。 ▲… さあ が自分で作ったしゃぼん玉をつぶして遊んでいるのを見て、年下の子が さあ がつぶす前にしゃぼん玉をつぶしてしまった。 さあ が怒っているのを見た みお が、「みおのつぶしていいよ」と さあ の前に大きなしゃぼん玉を見せると、 さあ は指でつぶしていた。 みお は「さあちゃん、たのしいな」と さあ の顔を見て話していた。(おもしろさの共有) ▲… さあ のしゃぼん玉が空高く飛ぶのを見て、他児が「さあちゃんすごい」と感心して言う。

- …**さあ**の遊びのおもしろさの内容
 ○…関係 **さあ**から保育士や周りの子へのかかわり
 ▲…保育士や周りの子どもから**さあ**へのかかわり

3 人権保育における集団作りを考える（ト田さんより）

① 子ども理解の視点や保育者の捉え方が大切であるとの話から

八木さんのお話からおとながどういうところにひっかかりをもつのか、あるいはもたないのかによって子どもの人権感覚や集団の価値観は大きく左右されると感じました。保育士が世の中の人の関係や人権にかかわることをよく見ているのかが問われていると改めて思いました。

② 集団づくりの話から

子どもたちのかかわりが増えていくなかで、決めつけも増えていくという話がありました。その視点を我々はもっておく必要があると思います。子どもたちがより知り合っ
て生活が深まっていくなかで、決めつけが酷くなることがあります。そういう時期もあることを考え、長期的に子どもたちにどうなって欲しいのか考えながら保育をしていくことが大事だと思います。

③ 核となる子を育てるとの話から

集団が変わるといのは、ある日突然変わることはありません。理不尽なことに「それっておかしいやん！！」という子がいて、そのような考えが広がるなかで同じように言える子が出てきて、徐々に集団は変わっていきます。

八木先生から
たくさんの視点を
いただきました



④ 4つの段階の話から

保育者がどこをゴールに考えているのかが大事ですね。集団づくりのゴールが仲良しの段階で終わっていないかということです。好きな友だちができて、好きな遊びができて、それがゴールではないんです。集団がある価値を追求していくうえでは、厳しさも必要になります。「さあちゃんがわるいわけちゃうやろ！！」と言い返せるということは、厳しさももっているということなんですね。「それはちがうよ」という関係が育っているということなんですね。保育者がそうした関係をめざしていなければ、1・2の段階で集団づくりが止まってしまいます。

⑤ 遊びをとおして変わっていった子どもの話から

「しゃぼん玉を楽しむ」ということをザックリ言ってしまえばそれで終わってしまいます。さあちゃんは「しゃぼん玉の何を楽しんでいるか」が大事です。保育士は子ども一人ひとりの楽しさを見通し、共感していきたいですね。さあちゃんの楽しさを八木先生はつかんでいながら、周りの子どもたちも共感して一緒に楽しさを感じ合えたんですね。

支援が必要なお子さんの場合、一緒に生活しているけど一緒に遊んでいない子どもが多いです。「一緒に遊ぶ」とはどのような状態なのか、その子が感じているおもしろさを共有できる仲間がいるということは大きいです。そう考えると、「この子は何を楽しんでいるの」ということを掴むことは重要になってきます。

4 子ども理解からめざすクラス集団像を考えよう

参加者の方に以下の視点でグループワークをしていただきました。

- ① 気になる子の姿とその周囲の子どもの姿を捉える
(関係と活動、尊敬・公平・反偏見の視点から)
- ② めざすクラス集団像を考える
- ③ ねらいを達成するために、どのような活動を大切にするのかを考える
- ④ 保育者のかかわりのポイントを考える

〈あるグループの話から〉

気になる子の姿

(気になる子) 元気いっぱいだが、力加減が難しく友だちに対して激しくかかわる子。
(周りの子) 「いつもどーんって押してくる、怖い子」と思っている。

(気になる子) 友だちとかかわりたいが、うまくかかわれず手が出てしまう。
(周りの子) その子が何もしていなくても「〇〇くん来やんといて」などと言い、何かされるのではないかと警戒している。

(気になる子) なかなか周囲に心を開けず、打ち解けない。
(周りの子) その子の言葉が出ないことを知りながら、おもちゃを取りあげる。

(気になる子) 好きな遊びが見つからない。「いや」など、自分の思いを出すことが苦手な子。
(周りの子) その子に対して「小さい子」「何も言わない子」と決めつけた見方をしている。

(気になる子) 保育所と家庭での姿が違う。ずっと泣いていたり、特定の保育士に求めたりする。
(家庭で) 落ち着いた姿を見せている。



めざすクラス像

今、目の前にいる子を何とかしたい！！

- 保育士や周りの子と一緒に好きな遊びを楽しむ。
- 安心して遊べる。それぞれを頼る、気遣える集団。
- いろんな友だちとかかわり、それぞれを認め合いながら一緒にいること、遊ぶことなど、友だちとかかわることを楽しめる楽しいと思えるクラスに。
- 自分の思いを出して、相手の思いも知る。友だちと一緒に関わることの心地よさを味わう。



ねらいを達成するために、どのような活動を大切にするか

- ふれあい遊びなど、数人とかかわる機会をつくり、友だちとのかかわりを楽しみながら距離感や力加減なども考えていけるようにし、さまざまな方向から友だちとのかかわり方を知っていけるようにする。
- ふれあい遊びなど、スキンシップを楽しむ。
- その子の好きな遊びのなかで、ワクワクしたりドキドキしたりして楽しさを共有する。
- 個々の発達段階によっては、一対一の間関係をまだ必要としている場合もあるので、じっくり一緒に遊びを楽しんだり、遊びをとおして友だちとかかわる楽しさを知ったりしていく。家庭に園での様子を伝えつつ、園が安心できる場所、楽しい場所であるようにしていく。



保育士のかかわりのポイント

- その子の好きな遊びを見つけて、一対一でゆったりとかかわったり、ふれあったりして遊ぶ。
- 個々の様子、姿をしっかり見て把握し、好きな遊びなど友だちとつなげられるきっかけを見つけ、保育士から友だちへ、友だち数人から集団へと、広げていけるようにかかわっていく。
- クラス担任との連携。母と話せる時間をつくる。安心できる存在となる。
- 保育士の見方を園内でふり返り、人を大切にする人権保育を発信する。
- 活動で子どもをつなげる。自信をもたせるなど、ねらいをもって遊びをしかける。



5 人権保育推進のための「次の一歩」を考える（未来への種まきワーク）

本日の専門講座の内容を受けて、人権保育を推進するために一人ひとりが「発信(次の一歩)」としてやってみようと思うことを書いていただきました。

- ・保育士が、子どもの姿を正確にとらえ、子どもの困り感を理解する。
- ・あたまをやわらかく！（おとなの常識にとらわれない）・いろんな人と話し合おう（職場でも）。気づけなかったいろんなことが見えてくる。（子どもの気持ち、保護者の気持ち、保育者の気持ち）
- ・自分自身の決めつけた見方を反省して、子どもを信じていきたい。保育者の言葉や表情、かかわり方が大切！
- ・まず、自分がぶれずにやってみよう。その次に、他職員の思いを知って考えよう。



- ・子どもの姿の背景を深く知ろうとする。そのためには子どもの楽しんでいることを一緒に楽しむ。
- ・保育士が何でもかんでも声をかけるのではなく、仲間関係の中で育ち合うことを大切にできるような姿を見守る。「どうする？」と考える仲立ちも大切にしていきたい。
- ・子どもの姿を見逃さずに、一日一日の保育を大切に作る。“瞬間”を大切にしたい。おとなの満足が主体となっていないかをふり返る。
- ・それぞれのクラスの気になる子についての担任の思いを聞き、共通の思いをもってクラスづくり、こどもたちにかかわれるようにしていきたい。こどもたちにとって安心できる先生になれるよう、かかわっていきたい。
- ・自分の価値観や決めつけに気づけるように、職員とたくさん話す。
- ・まとまっているクラスづくりでなく、一人ひとりが生き生きとしているクラスづくりに！！
- ・そのままの姿を認め、わかりあえる仲間を育てる。
- ・自分が気づいたこと、思ったことを勇気を出して言えるようにする。（こんなことを言っているのかな・・・と自信がない時が多いので）



6 参加者アンケートより

- 「共に育つ」とはどういうことか、普段の子どもの姿、自分の行動から振り返り、考えることができました。
- 八木先生の保育実践のお話、段階ごとに丁寧に見られていてとても分かりやすかったです。保育士の受け止め方によって、その後の保育の進み方が変わっていくという話がとても印象的でした。
- 経験を重ねるなかで、自分は少しずつ子ども理解ができていると過信していました。常識にとらわれず、頭を柔らかくすることは、保育はもちろん、全ての人権を考える根っこになるのではないかと感じました。
- 前回学ぶことが多く、今回とても楽しみに参加しました。クラス担任ではないのですが、自分の立場からできることを考え、担任と連携を図り、心地よい園づくりをしていきたいです。八木先生のお話、心に残りました。話し方から「保育」を楽しんでみえる感じがしました。
- 最後の気になる子どもの姿をグループで出し合う方法は、自分が何をするのがいいか分かりやすくなりました。
- 保育のなかで保育者の感覚が問われているところ、なかよしの段階をゴールだと思っていないかというところが心に残りました。
- 自分の価値観や決めつけは、誰かと話したり、聞いたりしていかないと気づけません。子どもたちにかかわる自分の価値観を確かめていくために、まずは職員と話をしていきたいです。そして、研修を積んでいろいろな気づきをこれからも大切にしていきたいです。3, 4の段階までを見通す自分の力の弱さも確認できました。園でしっかりとねらいを共有できるようにしていきたいです。